

昔の道具は、将来に 役立つ財産です

主任学芸員 (民俗学)
中藤 容子



滋賀県内には、古代から続く古い集落があちこちにあり、昔ながらの木造家屋や土蔵がまだまだ残っています。時折「古い昔の道具はいりませんか?」と電話があり、蔵の中を見せていただくことがあります。

身の引きしめる思いで暗い蔵の中に入り、じっくりと丁寧に、お家の方のお話を聞きながら丹念に見ていくと、一つひとつのモノがつながり、衣食住や生業の様子が見えてきます。地域にあるものを使い、知恵を使って工夫する暮らし



▲博物館の屋外展示には、はしかけ会員とともに作る田んぼと畑、昔の暮らしを体験する生活実験工房がある。「おりばたけ」では「近江はたおり探検隊」が綿や藍、青花を栽培している。(2006年7月 辻川智代撮影)

です。電気がなくても動き、身近にあるもので修理し使い続けることができる道具も少なくありません。

地球にやさしい暮らしを支えるこれらの道具は、きっとこれからの我々の暮らしにも役立つことでしょう。そこで、その価値を伝えるために、古い道具は、できるだけ使われていた地元に近いところで収蔵し、実際にその道具を使うことができるよう細かい付属品も残さず収集しようと、できる限りの努力をしています。

モノも、使う技も、失われようとしている今、志を同じくする方々と一緒に、昔の道具の価値をこつこつ掘り起こし、次の世代へ伝えていくことが、博物館学芸員としての私の使命です。

滋賀県に来て2年ほど、自己流でこの勉強をしていた私は、先生のご迷惑も顧みず、きのこの標本を届けたり、質問攻めにしたり。そうやって博物館へ通ううち、いつのまにか「はしかけさん」になりました。

当然「植物の会」に所属し、いまだに先生を困惑させています。私は、何にでも興味を持つ変人です。きのこの出る林の樹木名や林床の植物名を知りたがり、林道でヨレヨレにくたびれ

り博物館を観察をしています。神崎川の源流で無斑のイワナを釣り上げた時は、大興奮で博物館に届けました。

そんなこんなで、魚類の前畑先生や桑原先生、「ほねほね」の高橋先生というように、他の学芸員の方々からも図々しく教えるを請うようになりました。博物館には、「私が見つけたたくさんのきのこや模様のないイワナがある」と思うだけでも楽しく、図書室は、私の書齋のような感覚で、勝手気ままに出入りしている次第です。

滋賀県の「生き物調査員」に応募して、オープンしたばかりの琵琶湖博物館へ行ったのが、私と布谷先生との出会いでした。

そんなこんなで、魚類の前畑先生や桑原先生、「ほねほね」の高橋先生というように、他の学芸員の方々からも図々しく教えるを請うようになりました。

そんなこんなで、魚類の前畑先生や桑原先生、「ほねほね」の高橋先生というように、他の学芸員の方々からも図々しく教えるを請うようになりました。



▼葉別れのミツバチ

▲ハイカブリオニタケ

こんにちは！ 展示交流員です。



私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

「交流員と話そう」からの取材です。来館者の方とどんな交流があったのでしょうか。今回は水族展示室の「カイツブリ」をテーマにした2人の交流員さんです。

『カイツブリ』(中江交流員)

▶テーマを選んだ理由は?
▶カイツブリは潜水が上手な水鳥です。繁殖期にはつがいで生活し、水草で浮き巣を作ります。水草だけでなく流れ着いたさまざまなゴミで作っていることもあり、自然をどれだけ汚しているかをカイツブリの巣に

教えられたように思います。生態や行動だけでなく、環境という側面からも興味を持ちました。

▶お客様の反応はどうか?

▶カイツブリが水中に潜ると、ほとんどの方が「キャーかわいい」、「上手ね」と無邪気に喜ばれます。どちらかというと、子供さんより大人の反応がよいです。

『滋賀県の鳥「カイツブリ」』(吉岡交流員)

▶どのような内容ですか?

▶水鳥のコーナーはお客さんに大変人気があります。ここにいるカイツブリという鳥は、別名を「鳩」といいます。鳥の羽についてお話ししています。

▶手に持っているのは鳥の羽ですか?

▶カイツブリの羽ではないのですが本物の鳥の羽です。

お客さんにルーペで見てもらうのです。拡大すると面ファスナーのような構造で連結することができるようになってるのがわかります。これは羽を一体化させるためです。

また、カイツブリは潜水しても体に水が付きにくくなっていますが、それは尾の付け根から分泌される脂を羽に塗っているからなのです。



中江交流員(左)と吉岡交流員(右)